

学会ニュース

第81号 2016年4月

目次

| | |
|---------------------------------------|---|
| ・2016年度学会費納入のお願い | 1 |
| ・第38回大会について | 1 |
| ・大会における託児所・ベビーシッターの利用について | 1 |
| ・共通論題趣旨説明：「18世紀 ー持続と切断ー」 長尾 伸一 | 2 |
| ・【エッセー】 18世紀研究とシャルリー・エブド襲撃事件 隠岐さや香 | 3 |
| ・事務局より | 4 |

2016年度学会費納入のお願い

代表幹事 長尾 伸一

2016年4月より新たな会計年度となりました。払い込み用紙を同封いたしましたので、年会費の納入をお願い申し上げます。年々、会計状況が厳しくなっております。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

第38回大会について

今年度の第38回大会は2016年6月18日（土）、19日（日）の両日、愛知県立大学長久手キャンパスで開かれる予定です。開催校責任者は大野誠会員です。

共通論題は19日（日）開催で、テーマは「18世紀 ー持続と切断ー」です。コーディネーターは長尾伸一代表幹事です（次ページ以降の趣旨説明をご覧ください）。

大会の詳細は同封のプログラムをご覧ください。

ご出欠は同封の葉書でお知らせください。**5月27日（金）まで**にご返送ください。多くの会員の皆様のご参加下さいますよう、お願いいたします。

大会における託児所・ベビーシッターの利用について

当学会では、子育て中の会員も大会に参加しやすいように、会場にて託児所を準備いたします。会場の託児所の利用をご希望の方は大会出欠はがきにてご連絡ください。

なお、大会参加時に託児所・保育所・ベビーシッター等を利用される場合は、学会が保育費の半額を負担いたします。ご希望の方は、学会終了後領収書を事務局までお送りください。後日学会負担分をお振込みいたします。

※シッターを手配する都合上、大会会場の託児所のご利用を検討されている会員の方は、できるだけお早めにご連絡をお願いいたします。ご不明な点がございましたら事務局までお知らせください。

【第38回大会共通論題 趣旨説明】

「18世紀 —持続と切断—」

コーディネーター：長尾 伸一（名古屋大学）

日本18世紀学会の名称のもととなっている「18世紀」という研究対象の区切り方は、「啓蒙思想」の枠組みに限定することなく、その周囲や背後に広がる歴史的諸現象を包括的にとらえていくという、研究の発展、緻密化とともに変化してきた問題意識に基づいていると思われます。しかしこの言葉を字句通りに理解すると、研究上不都合を生じます。この「世紀」の文化的、社会的、政治経済的諸現象を、1700年から1799年までという物理的時間の持続の中に閉じ込めることはできません。たとえばフランスにおける「啓蒙」の起源を考える場合には17世紀末の展開の理解は不可欠になりますし、名誉革命から19世紀前半までが一つのまとまりとなるイギリス史からは「長い18世紀」という時代区分が提案されています。このように考えると、物理的時間とずれた形で時代としての「18世紀」を定義する必要があるのかもしれませんが、これらは時代区分の問題ですが、一般に「18世紀研究」という際には、「18世紀」にどのような歴史的文脈性を含意させるのかが問われるでしょう。

「18世紀」という時代の観念にはなんらかの形で「近代」の概念がかかわってきますが、さらに目を18世紀のアジアに向け、異質性を前提としつつ、ヨーロッパ、アメリカとの同時代性を検出しようとする、時代としての「18世紀」の意味内容を限定する困難さがより明確になります。とくに文明史のほとんどの時期にわたって世界の先進地域の一つであり続けた中国史を同時代史の中に包摂しようとする、それがはっきりしてきます。中国は国家、法、文化、思想、社会のさまざまな分野にわたって、ヨーロッパでは「近代」の所産とされてきた諸要素が古くから存在してきました。長期にわたる中国の歴史は、欧米の学会から生まれた時代としての「近代」の内容の再検討を迫っています。半面中国の「近代」は欧米列強や日本に蹂躪された暗い時代ととらえられ、これに対して進歩や発展を意味する言葉は「現代」とされています。

このように「18世紀」学の展開のためには、欧米史だけでなく比較研究をも踏まえた、「世紀」の内容の検討が必要ではないでしょうか。日本18世紀学会は国際18世紀学会の中で、非欧米文化圏では最大の学会です。多様な視点から「18世紀」とは何かを明らかにする作業は、本学会にふさわしい課題であると思われます。報告では、ヨーロッパや東アジアについての歴史学の最新の成果を紹介しつつ、思想史的、文化史的視点を加えて、この問題に実証的かつ大胆に接近していきます。これらにフロアからのさまざまな視点からの質問、問題提起をいただき、本学会らしい学際的な討議の場を作り上げていくことができれば幸いです。

【エッセー】

18世紀研究とシャルリー・エブド襲撃事件

隠岐 さや香（名古屋大学）

フランスでシャルリー・エブド襲撃事件（以下CH事件）が起きた2015年は、少なからぬフランス18世紀研究者が自身の研究と現代の諸問題とのつながりを痛切に意識した年だったのではないか。あれから1年半が過ぎ、相次ぐ欧州域内でのテロ事件、中東での戦乱とそれが引き起こす難民の到来、そして幾つかの国における極右の台頭など、事態は沈静化することなく混迷はむしろ深まっている。CH事件の衝撃もさめやらぬ時期、フランスではCatriona Sethら35名の研究者達が仏18世紀学会の支援のもと、ある作業を始めた。それは「寛容」や「表現の自由」を軸とした啓蒙期の著者たちのアンソロジーを編纂することであった。翌月にそれは早くも完成し、『寛容～啓蒙の闘い』（*Tolérance: le combat des Lumières*）と題され、フランス全土のキヨスクで販売された。ヴォルテールを中心に啓蒙期に活躍した総勢40名の著者からの抜粋を集めた同書は1789年の「人権宣言」からはじまり、狂信と不寛容を弾劾したヴォルテールの『寛容論』、そしてディドロやルソー、モンテスキューの引用が複数あるのは言うまでもなく、女性の人権に関するコンドルセやオランプ・ド・グージュの論考や英国ジョン・ロックの政教分離論、匿名著者による同性愛行為の擁護論など、幅広い論点を集めている。

既にCH事件の直後から、啓蒙思想への言及、とりわけヴォルテールの図像は至る所に見られた。路上にはポスターの形で彼の顔が掲げられたし、『ルモンド』誌の風刺画でも彼への言及があった。そして書店では『寛容論』がこれまでにない売れ行きを見せたという。上述のアンソロジー出版は、少なくとも社会の一部で共有されたこのような啓蒙思想への関心に呼応したものであった。

フランス人研究者達の熱意に対し、即座に共鳴したのが海峡の向こう側、英国の18世紀研究者たちである。そして英国18世紀学会の支援のもと、オックスフォード大学の教員15名と100名ほどの学生達が連携し、2016年初頭に『寛容』の翻訳版を完成させたのであった。翻訳版は『寛容～啓蒙の灯火』（*Tolerance: The Beacon of the Enlightenment*）と題され、英語版独自の序文と挿絵入りで電子版が無料公開された（<http://www.openbookpublishers.com/reader/418>）。事件から少し時間を経て書かれたその序文では、啓蒙があらゆる不寛容への闘いの出発点であること、そして何より過去のものではなく、現在進行形かつ未完のプロジェクトであることが強調されており印象的である。

日本の18世紀研究者でも、新潟大学の逸見龍生氏や私、隠岐をはじめとする数名が『寛容』仏語版の内容提供を受け、翻訳企画について検討を開始している。現時点ではまだ明確なことはいえないが、個人的には、少し時間が経っていることや、日本と欧州の文化的な距離などを踏まえるとCH事件への反応に留まらない長期的な視野をもって企画を考える必要がありそうだと感じている。それこそ、改めて西洋を支えた思想と向き合い、これまでの18世紀研究が日本社会に伝え切れていないことは何であるのかを問い直すくらいの姿勢が必要に思えるのだ。

たとえば、かつて宗教学研究者に聞いた話であるが、日本の人々は宗教の問題となると「自分たちに宗教はない。だから寛容だ」と捉えがちであるという。だがその一方で、共同体の規範や、何らかの権威に唾を吐くという行為に対しての拒絶感は強い。儒教的な文化背景が原因かどうかは知らないが、「マナー」「礼儀」へのこだわりも強く、一部には「人権」や「自由」すら「ルールを守る人が得られる特権」であるかのように曲解する人も少なくない。

しかしながら啓蒙期の著者達による「寛容」とは、究極的な話、どんなに価値観の折り合わない無礼で嫌悪を感じるような相手であっても、殺し合わず共存するための解決法を探るものであったし、天賦の「人権」はその議論の出発点であったはずだ。「寛容」の議論におけるそのような本質は、多様性の増す現代の東アジアでは一層切実となっているわけだが、そのあたりも含めて翻訳を通し伝えていけるだろうか。

時事問題への対応から18世紀研究者としての覚悟を問われる。幸か不幸か、そんな時代を生きている。



事務局より

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか 苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。なお、口座番号は以下の通りです。

＜郵便口座振替で振り込む場合＞

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会事務局

＜銀行等から振り込みする場合＞

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

『年報』への論文投稿について

すでにご存知と思いますが、数年前から、大会での発表をもとにした論文以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、例えば「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りませす。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

寄付のお願い

寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお2014年9月より、新しいメーリングリストが稼働しております。これまでメーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順): 出羽尚、王寺賢太(国際幹事)、大石和欣(常任幹事)、隠岐さや香、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、小関武史(常任幹事、年報担当)、斉藤渉、坂本貴志(常任幹事、年報担当)、武田将明、玉田敦子(常任幹事)、寺田元一(東アジア交流担当)、長尾伸一(代表幹事)、馬場朗、逸見龍生(常任幹事、年報担当)

会計監査: 安室可奈子、真部清孝

日本18世紀学会ニュース 第81号 2016年5月発行
発行者 日本18世紀学会 代表者 長尾伸一
事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局
e-mail: jsecs.nagoya.uni@gmail.com
tel: 052-789-2380
fax: 052-789-4924
<http://www.gakkai.ac/jsecs/>